俳句の可能性⑵

宇多　喜代子

B　いくたびも雪の深さを尋ねけり　　正岡子規

　雪が激しく降っている。重い病気で寝ている子規が、僅かに見える障子の穴からその様子を見ている。どのくらい積もったのか、確かめることができない子規は、病室を出入りする人に、積雪の様子を幾度も尋ねる。今、くるぶしくらいまで積もったよ、とか、膝が埋まるくらいになったよ、などと聞き、庭や道路や公園に積もった雪景色を想像する。

　降る雪のことを詳しく説明したくても、「定型」という制約の中では全部言い尽くせない。そこを補うために工夫された方法の一つに「切れ字」がある。例えば、冒頭の句で、これ以上は言えないという断念を表しているのが、最後の「かな」であり、子規の句の「けり」である。

（中略　次の三句は本文で紹介されている句です。）

C　跳箱の突き手一瞬冬が来る　　友岡子郷

D　たんぽぽのぽぽと絮毛のたちにけり　　加藤楸邨

E　分け入つても分け入つても青い山　　種田山頭火

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) **B**の句の季語と季節を答えなさい。

季語〔　　　〕 季節〔　　　〕

(2) **D**の句の季語と季節を答えなさい。

季語〔　　　〕 季節〔　　　〕

(3) **B**と**D**の句に共通して含(ふく)まれている切れ字を答えなさい。

〔　　　〕

(4) **B**〜**E**の句の中から、自由律俳句を選び、記号で答えなさい。

〔　　　〕

(5) **B**〜**E**の句の中から、体言止めが用いられている句を選び、記号で答えなさい。

〔　　　〕

(6) ――線部「『定型』という制約」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア 五・七・五の十七音で表現しなければならないこと。
イ 季節を表す言葉を用いなければならないこと。
ウ 句の切れ目を表す言葉を用いなければならないこと。

〔　　　〕

(7) 次の①〜④は、**B**〜**E**のどの句について述べたものか。それぞれ記号で答えなさい。

① 声に出して読むと、唇(くちびる)の形や声の響(ひび)きが、丸いわた毛の軽(かろ)やかさを感じさせる。
② 繰(く)り返される言葉に、旅の中ひたすら深い山道を歩む作者の姿が感じられる。
③ 空中に飛び上がった一瞬が捉(とら)えられており、大気に感じた冬の訪(おとず)れがうたわれている。
④ 病床(びょうしょう)にあって、雪が降る外の景色が気にかかる作者の心情がうたわれている。

①〔　　　〕 ②〔　　　〕 ③〔　　　〕 ④〔　　　〕